

【一】 次の文章を読んで、設問に答えなさい。

「西側民主主義の危機はジャーナリズムの危機である。」——1920年にリップマンが書いた言葉だ。両者は密接に絡みあっており、この関係の未来を理解するためには、まず、過去を理解する必要がある。

①「世論」が存在しない時代があったことは、いまでは想像することさえ難しい。しかし、16世紀半ばでも、まだ、宮廷政治の世界だった。新聞は経済ニュースや海外ニュースしか取りあげず、ブリュッセルのフリゲート艦からの報告やウィーン貴族の手紙が活字に生まれ、ロンドンで商売をしている人々に売られていた。壁の外にいる人々の考えに興味があると進歩的な官リヨウが気づいたのは、近代的な中央集権国家が誕生し、国王に資金提供できるほど裕福な個人が生まれてからだった。

大衆の王国が③aり、また、そのメディアとしてニュースが③b隆した背景には、水の輸送から帝国の問題など、個人の狭い体験に収まらない複雑な社会的問題の登場があった。もうひとつ、技術的な変化も要因のひとつだ。ニュースは④が伝達内容に大きな影響を与えるのだ。

語る言葉は目の前にいる人々を対象としてきた。それを大きく変えたのが、書かれた言葉——なかでも印刷機力である。実際問題として、世間一般という聴衆が生まれたのは印刷機が登場したからだ。誰とも特定できないほど幅広い集団に伝達する能力が生まれた結果、啓蒙思想の時代が幕をあけた。研究者や学者が印刷機を活用し、遠くの人を含む幅広い聴衆に複雑なアイデアを正しく届けられるようになったのだ。そして、すべての人が文字どおり同じページを読めるようになった結果、筆写の時代には手間がかかりすぎて無理だった国境を越える交流が始まった。

アメリカ大陸の植民地では印刷産業が急成長し、アメリカ独立革命のころには新聞社の密度も種類も世界一という状態となっていた。当時の新聞は白人の

地主向けばかりだったが、それでも、共通の言語と共通の反対意見を提供していたことはまちがいが無い。トマス・ペインが発行したパンフレット『コモンセンス』は、多様な植民地のあいだに共通の利害と連帯の感覚をもたらす⑤となった。

草創期の新聞は市場価格や市場の状況を事業主に提供するもので、定期購読料金と広告収入で運営されていた。米国でごく普通の市民がニュースの中心的な受け取り手となるには、1830年代にはいり、一部売りをする安価な「ペニー新聞」の登場を待つ必要があった。いま、我々がニュースと考えるものを新聞が提供するようになったのは、このときなのだ。

少人数の特権階級のみだった「世間」が大衆へと変化した。ミドルクラスが増えたわけだが、ミドルクラスとは国家の動向の影響を日々受ける人々であるとともにエンターテイメントに時間とお金をつぎ込む余裕のある人々で、ニュースとドラマを強く求めた。新聞の発行部数は急上昇。全体的な教育程度も改善され、現代社会が複雑に絡みあっていることも理解されるようになる。ロシアでなにかが起きるとニューヨークで物の値段が動くのなら、ロシアのニュースも追っついておいたほうがいいわけだ。

こうして民主主義と新聞は関係が深くなっていったが、その関係は快適なものではなかった。第1次世界大戦後には新聞の役割について緊張が高まり、当時を代表する知識人ふたり、ウォルター・リップマンとジョン・デューイが激しい論争をくり広げた。

第1次世界大戦のプロパガンダに新聞が利用されたことにリップマンは腹を立てており、1921年、『自由とニュース』を著す。この評論でリップマンは、戦時中、「政府は世論を徴兵した……行進させたのだ。直立不動の姿勢や敬礼の仕方を教練した」という編集者の言葉を引用した。そして、新聞が存在し、かつ、(平均的な市民が)知るべきこと、すなわち信じるべきことの規範がまったく私的に吟味されていない場合、それがいかに高貴なものであれ、民

主的政府の実体が確保されているとは言いがたいとした。

その後10年間、リップマンはこの思索を深めてゆき、世論は従順すぎる——簡単に人々は誤った情報に導かれ、操作されてしまうとの結論に達する。

1925年の『幻の公衆』は、幅広い情報に基づいて合理的に判断する民衆という幻想を打ちこわそうとするものだった。この本でリップマンは、十分な情報を得れば、重大な問題についても市民が正しく判断できるといった民主主義の神話に異議をとなえた。ここで必要とされる「万能の市民」など存在しない。普通の市民に任せてよいのは実セキをあげられない政党を選挙で落とすことまで。統治は、十分な教育をうけ、進行する事態の真の姿を見る能力を持ったその道の専門家に任せなければならない——そう、リップマンは主張した。

これに反論したが、民主主義を推進する有名哲学者、ジョン・デューイである。『幻の公衆』をうけてデューイは一連の講演(「公衆とその諸問題」)をおこない、まず、リップマンの批判は多くがまちがっていないと認めた。メディアは人々の意識を簡単に操作できるし、適切に統治できるほど十分な情報が市民に与えられる状況にはないとしたのだ。

しかし、とデューイは続ける。リップマンの説に従うのは、民主主義という希望をあきらめることに等しい。この理想がまだ十分に実現されていないのは確かだが、そういう日がくる可能性もある。「人として学ぶとは、コミュニケーションという⑩を通じて、ほかの誰でもない自分としてコミュニケーションに参加しているという感覚を得ることを言う」。1920年代はどこも閉鎖的で、民主的な参加を歓迎するところはなかった。そのなかでジャーナリストや新聞は国家の問題は人々の問題でもと呼びかけ、人々が内にもつ市民を呼びさまして民主的な参加を推進する重要な役割を果たすことができる——デューイはそう主張した。

どうすべきかという面は大きく異なっていたが、ニュースの制作が基本的に⑪な仕事であること、大きな責任を伴う仕事で十分な注意が必要である

ことはデューイもリップマンも同意見だった。また当時、新聞はいくらでも儲かる仕事で、耳をかたむける余裕もあった。その結果、リップマンの意見を取りいれて営業部門と報道部門を分離する新聞が登場する。そのようなところは次第に客観性を支持し、偏向した報道を糾弾するようになっていった。20世紀の後半、ジャーナリストの矜持を支えたのは、この倫理的モデル、すなわち、新聞は中立的立場から報道をおこない、世論を形成するというものだった。もちろん、このように高尚な目標に向って達しない例もよく見られたし、この目標をどれほど真剣にめざしているのか怪しい場合もあった。ジャーナリズムよりドラマと利益が優先されることは珍しくない。大手メディアも広告主をなだめるために報道の方針を変更する。「公平と均衡」を標榜していても、現実の姿がそうであるとはかぎらない。

イライ・パリサー「閉じこもるインターネット——グローバル・パーソナライズと民主主義」  
井口耕二訳(二〇二二年、早川書房)より、出題のため、一部表記を改めた。

問一 傍線部①に関して「世論」の登場に最も寄与していないものを一つ選

び、記号で答えなさい。

ア ウィーン貴族の手紙

イ 個人の狭い体験に収まらない複雑な社会的問題の登場

ウ 印刷機の登場

エ 印刷産業の急成長

オ トマス・ペインによる『コモンセンス』の発行

問二 傍線部②に相当する漢字を含む文を一つ選び、記号で答えなさい。

- ア まったく度リヨウの大きな人だ。
- イ 君は要リヨウを得ないな。
- ウ どこかでリヨウ替できないものか。
- エ 車窓からリヨウ線が一望できる。
- オ 今夜は同リヨウと食事に行く。

問三 空欄③aと③bには共通の漢字が一字入る。これと同じ漢字を含むものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 海外コウ易
- イ ジヨウ昇気流
- ウ 緊急トウ板
- エ 産業振コウ
- オ 三角ジヨウ規

問四 空欄④に入る最適な語を一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 伝達密度
- イ 伝達順序
- ウ 伝達方法
- エ 伝達基準
- オ 伝達速度

問五 空欄⑤に入る最適な語を一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 誕生
- イ 一助
- ウ 方法
- エ 過程
- オ 対象

問六 傍線部⑥に関して、新聞の役割として本文中に挙げられていないものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 共通の言語と共通の反対意見を提供すること
- イ 市場価格や市場の状況を事業主に提供すること
- ウ 国家の動向についての情報を提供すること
- エ エンターテイメントを提供すること
- オ 民衆の幻想を打ちこわそうとすること

問七 傍線部⑦をひらがなで書いた場合の最初の一字を選び、記号で答えなさい。

- ア あ
- イ か
- ウ し
- エ ち
- オ と

問八 傍線部⑧の様な表現法を何と言うか。最適なものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 反復法
- イ 反語法
- ウ 倒置法
- エ 擬人法
- オ 列挙法

問九 傍線部⑨の文中での意味として最適なものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 十分に検証されていない記事を、知りたいことと信じたいことを混同した読者が読む場合
- イ 新聞記者の書いた高尚な論説について、十分に理解できる読者が存在しない場合
- ウ 人々にどのような情報を提供するかが、公的な観点からの検証を受けずに決定されている場合
- エ 民主制についての理解に乏しい読者ばかりで、新聞の存在意義が人口に膾炙していない場合

- オ 知や信仰の対象が、民主主義のルールを無視した仕方 で集团的に決定されてしまう場合

問十 傍線部⑩を別の言葉で言い換えた場合に最適なものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 影響を受けにくい
- イ 順応性に欠けている
- ウ 飼いや慣らしやすい
- エ 過剰反応する
- オ 本質を理解できない

問十一 傍線部⑪に相当する漢字を含む語を一つ選び、記号で答えなさい。

- ア セキ任
- イ 痕セキ
- ウ 書セキ
- エ 体セキ
- オ 紡セキ

問十二 空欄⑫に入る最適な語を一つ選び、記号で答えなさい。

- ア ギブアンドテーク
- イ キャッチアンドリリース
- ウ ストップアンドゴー
- エ ケースバイケース
- オ アップアンドダウン

問十三 傍線部⑬「人々が内にもつ市民を呼びさまして」を別の言葉で言い換えた場合に最適なものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 個人に潜在する市民としての役割や意識を喚起して
- イ 住人にその市に居住しているという事実を思い出させて
- ウ 市民たちに自らが住む市への郷愁の念を呼び起こさせて
- エ 自己利益の優先は個人の権利であることを強調して
- オ 市民同士の人間関係の構築と活発な交流を促すことで

問十四 空欄⑭に入る最適な語を一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 政治的・論理的
- イ 政治的・倫理的
- ウ 民主的・論理的
- エ 民主的・伝統的
- オ 民主的・実務的

問十五 傍線部⑮をひらがなで書いた場合の最初の一字を選び、記号で答えなさい。

- ア き
- イ こ
- ウ し
- エ ち
- オ と

問十六 傍線部⑯の言い換えとして最適な語を一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 人格  
イ 自負心  
ウ 能力  
エ 責任感  
オ 好奇心

問十七 傍線部⑰に相当する漢字を含む語を一つ選び、記号で答えなさい。

- ア トウ錯  
イ トウ作  
ウ トウ底  
エ トウ選  
オ トウ球

問十八 この文章の中で述べられていることとして当てはまるものを二つ選び、記号で答えなさい。

- ア アメリカの初期の新聞は一般市民向けのもではなく、読者は市場価格や市況を知ろうとした事業主たちであった。  
イ ジョン・デューイは、市民が十分な情報を持っていても正しい判断ができるとは限らないため、統治は専門家に委ねるべきだと唱えた。  
ウ ジャーナリズムの目標は「公平と均衡」であるが、新聞の営業部門と報道部門を分離することで、報道内容が偏りやすくなってしまふ。  
エ 第一次世界大戦中、政府の宣伝に新聞が利用されたが、ウォルター・リップマンはその状況を肯定的に捉えていた。  
オ 娯楽のためにお金と時間を費やすミドルクラスの増加によって、新聞を読む人も大幅に増えていった。

【二】 次の問一から問七に答えなさい。

問一 例文の傍線部に相当する漢字を含むものを一つ選び、記号で答えなさい。

【例文】 夜空に輝くコウセイはみずから光を発している。

- ア 彼はコウセイに名を残すだろう。  
イ 幾セイ霜の年を重ねる。  
ウ この会社は福利コウセイが充実している。  
エ 練習試合でもコウセイな判定を心がける。  
オ このデータは複数の要素からコウセイされる。

問二 次の文のうち、敬語の使い方として最適なものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 先生、私の書いたレポートは拝見していただけましたか。  
イ 先生、私の書いたレポートは拝見されましたか。  
ウ 先生の描かれた絵を拝見しました。  
エ 先生の描いた絵を見ました。  
オ 先生、私の書いたレポートは拝見しましたか。

問三 傍線部の語の意味・用法が例文のものと最も近いものを一つ選び、記号で答えなさい。

【例文】 この着物は、叔母から譲り受けたものだ。

- ア 彼女のランニングフォームはきれいだ。  
イ 午後から雨が降るようだ。  
ウ 探していたのは、この本だ。  
エ 彼はプロ野球選手になりたいそうだ。  
オ 今朝はじっくり新聞を読んだ。

問四 「過ぎたるはなお及ばざるがごとし」という慣用句の意味として最適なものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 過去のこととは後悔しても取り返しがつかない。  
イ 過去を反省して将来にいかすことが大切だ。  
ウ 度を過ぎることは足りないことと同様によくない。  
エ 期限内に遅れることは取り返しがつかない。  
オ 過去に起きたことは将来また起きる。

問五 「重宝」という語と最も近い意味の語を一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 名誉  
イ 得意  
ウ 高貴  
エ 重厚  
オ 便利

問六 次の作品のうち作者が他と異なるものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 『山椒魚』  
イ 『小僧の神様』  
ウ 『城の崎にて』  
エ 『暗夜行路』  
オ 『清兵衛と瓢箪』

問七 次の作品のうち執筆された年代が他と大きく異なるものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 『竹取物語』  
イ 『土佐日記』  
ウ 『枕草子』  
エ 『伊曾保物語』  
オ 『源氏物語』